

《履修上の留意事項》 この科目は1～12回を9グループに分けて、10名の担当教員が同時開講します。
13～15回は、症例報告会（全教員合同）

《担当者名》○田村至 tamurait@hoku-iryo-u.ac.jp 鈴木瑞恵 永見慎輔 前田秀彦 若松千裕 飯泉智子 柳田早織
葛西聡子（各1名1グループ担当） 小林健史・辻村礼央奈（2名で1グループ担当）

【概要】

これまでに学んだ基礎および専門科目の知識を整理・統合し、さらに実践的知識・技能の獲得を図ることにより、臨床実習で学ぶ活きた言語聴覚療法を効果的かつ円滑に習得できるよう準備する。講義・演習では、症例に関して検査記録、評価、訓練プログラムの作成などを含む症例報告書を作成する。演習は、医療現場における知識の実践的応用力を身に着けるため学生同士で問題発掘、解決を主体的に行う問題解決型学習Problem-based learning(PBL)により実施する。

【学修目標】

<一般目標>

臨床実習において、医療現場での評価法や訓練などの技能を効果的かつ円滑に習得するために、言語聴覚療法各領域の症例を通して、言語聴覚療法の実践的知識を科学的に理解し症例報告書を作成する技能を身につける。

<行動目標>

1. 言語聴覚障害を生じた症例の病態生理を科学的に説明できる。
2. 言語聴覚療法各領域の症例に対する言語聴覚療法評価を説明できる。
3. 言語聴覚療法各領域の症例に対する言語聴覚療法介入を説明できる。
4. 症例の病態、検査結果、障害メカニズム、訓練プログラムの立案を包括する症例報告書を作成できる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	ガイダンス	講義の概要、学習目標、内容、スケジュール、学習方法の説明	全担当教員
2) 12	演習	症例のプロフィール、検査結果の解釈（評価）、訓練プログラムの立案、考察を含めた症例報告書の作成	全担当教員
13) 15	症例報告	症例報告会	全担当教員

【授業実施形態】

面接授業

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【評価方法】

課題レポート 100%

【教科書】

各領域の講義で紹介された教科書および配付資料

【学修の準備】

予習は、教科書、参考書あるいは授業で配布された資料を読んで理解に努めること（80分）。

復習は、教科書、参考書および授業で配布された資料に基づき、確認と理解に努めること。（80分）。

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

（DP2）最新のリハビリテーション科学を理解し、保健・医療・福祉をはじめとするさまざまな分野において科学的根拠を有する専門技術を提供できる能力を身につけている。

（DP3）言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。

（DP4）関係職種と連携し、質の高いチーム医療の実践的能力を身につけている。

（DP6）社会の変化や科学技術の進歩に対応できるよう、常に専門領域の検証と、積極的な自己研鑽および言語聴覚療法科学の開発を実践できる能力を身につけている。

【実務経験】

田村至、鈴木瑞恵、永見慎輔、小林健史、前田秀彦、飯泉智子、柳田早織、葛西聡子 辻村礼央奈、若松千裕（言語聴覚士）

【実務経験を活かした教育内容】

医療機関での臨床経験を活かし、言語聴覚士として必要な実践的知識の理解を深める講義を行う。